

鹿 富 中 。 耳 た を を

「日本人ルーツ解明に重要」

青谷上寺地遺跡出土の大量人骨

DNA分析成果中間報告

国立科学博物館や鳥取県立文化財センターなどが共同で進めている国史跡青谷上寺地遺跡（鳥取市青谷町）で出土した弥生時代後期後半（2世紀）の大量の人骨のDNA分析について、中間成果報告会が17日、同館総合支所で開かれた。同館の篠田謙一副館長が登壇し、ほとんどが渡来系の特徴を持ち母系の血縁関係が見られな



後期弥生時代出土のDNA分析結果について説明する篠田副館長＝17日、鳥取市青谷町総合支所

座 労 博 の 山 大 の 町 大 山 大
 場（八頭町）の新YAZU
 ガーや、初参戦の横須賀
 大 コス カネイ ビーバ ーガ

りつけ!!

分析では歯根や内耳骨40点を調べ、32点で母親の遺伝情報が分かるミトコンドリアDNAの分析結果が得られた。祖先が共通する集団「ハプログループ」の縄文系は3%にとどまり、大部分は渡来系だった。また、29系統もの母系の異なるハプログループがあった。篠田副館長は「当時の日本は縄文系と渡来系の混血がある程度進んでいたと考えられていたが、どのように進んだか全く分かっていなかった」と指摘。さらに詳細な分析ができる核DNAの調査結果を待ちたいとした上で「渡来人の拡散の状況や渡来の時期を含め、日本人の成り立ちほ

んな単純な図式では解
 決できないのではない
 か」と述べた。

母系の血縁関係がほ
 ぼない状態については
 「中世の都市のような
 在り方」と解説。「弥
 生のムラのイメージと
 は異なる。より広い範
 囲での交流など、何を
 意味するのか検討しな
 ければ」と述べた。

今後、32点のうち5
 点について核DNAを
 分析。成果は、来年3
 月に同市のとりぎん文
 化会館で開くシンポジ
 ウムで発表する予定。
 同遺跡展示館では、
 DNA分析に用いた頭
 蓋骨5点が展示されて
 いる（月曜休館）。

（渡辺暁子）